

6  
その



→ 稲毛観音霊場発祥の地 ←

# 平地区について

平は多摩丘陵が東西に延び、その中央を平瀬川が西から東に流れる。平瀬川沿岸には氾濫原が帯状に広がり、浸食された丘陵には谷戸が多く発達している。平が初めて文献に表れるのは、永禄2年(1559)の「小田原衆所領役帳」である。その中に「平之村 葛山」とある。江戸幕府成立後は旗本木造氏の知行を経て天領となる。明治22年(1889)、市制・町村制により平村は長尾・菅生、上作延村の飛地と合併して向丘村になる。昭和13年(1938)には川崎市に合併、さらに昭和47年に高津区に編入され、同57年には宮前区として分区された。平には、縄文時代中期の集落跡が発見された初山天台遺跡、弥生時代後期から奈良時代にかけての集落跡が発見された平風久保遺跡もある。



白幡八幡大神

## ⑤ 薬王庵



曹洞宗の寺で、本尊は如意輪観音像の供養塔。準西国稲毛三十三所観音霊場第32番札所。この供養塔は「あがり観音」とよばれ、観音霊場を巡拝し終えた信者が参拝した。江戸時代の宝暦年間(1751~64)、平村の名主・山田平七が西国・秩父・坂東の観音霊場を巡礼後、稲毛に観音霊場を作った。境内には山田平七の墓などがある。

## ⑥ 平瀬川



宮前区内最長の川。本流は潮見台、支流は東百合ヶ丘に水源を持つ。流路は曲流し、頻繁に洪水を起こした。昭和20年代まで平・長尾などの水田を潤し、溝口を経て鶴見川に合流。その後、多摩川水系に変更された。

## ⑦ 東泉寺旧地

以前、東泉寺はこの辺りに建てられていた。文安2年(1445)銘の板碑、享保14年(1729)銘の庚申塔がある。北側の平瀬川は急崖で、座頭淵とよばれていた。

## ポイント解説 (数字は裏面の散策コースのポイントに対応しています。)

### ① 向ヶ丘緑地



約80mの高地に国土地理院の四等三角点を立てられている。三角点は、三角測量を行う場合、経度・緯度、標高の基準点になる。三角点の標石は、見通しが良い山頂や台地の上に立てられる。標石には三角点の等級・方位などが記される。

### ④ 初山天台遺跡



昭和40年に発掘調査された、縄文時代中期の大集落跡。竪穴住居跡が21ヶ所で発見された。勝坂式土器と合わせて、新潟県姫川のヒスイも出土。周辺は標高60m前後の高地にあり、鷺沼から枳形山に向かう鎌倉道が通過していたと考えられる。

### ② 王禅寺道

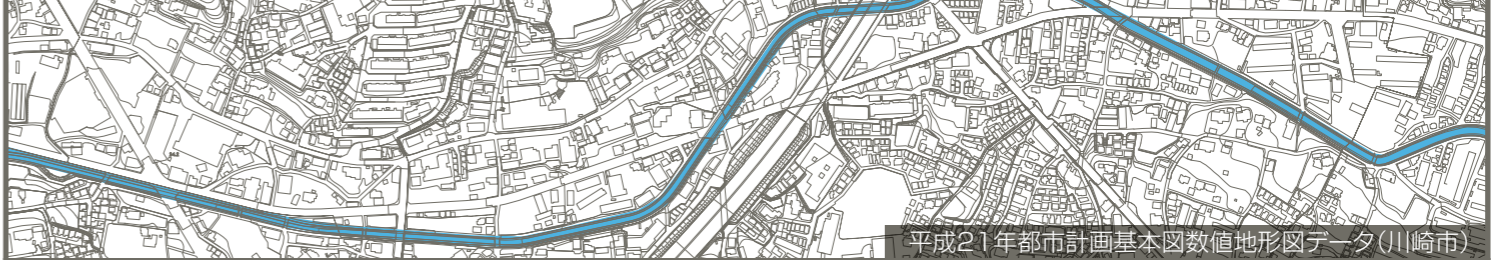
宮崎大塚を起点とし、麻生区の王禅寺に向かう参詣道。宮前生活環境事業所前で大山街道から分岐し、途中、上作延・神木・けやき平・犬蔵・水沢を通り、保木薬師を参拝していた。けやき平の最高点には、「高師(たけし)の一本松」とよぶ大木がそびえていた。

### ③ 白幡八幡大神

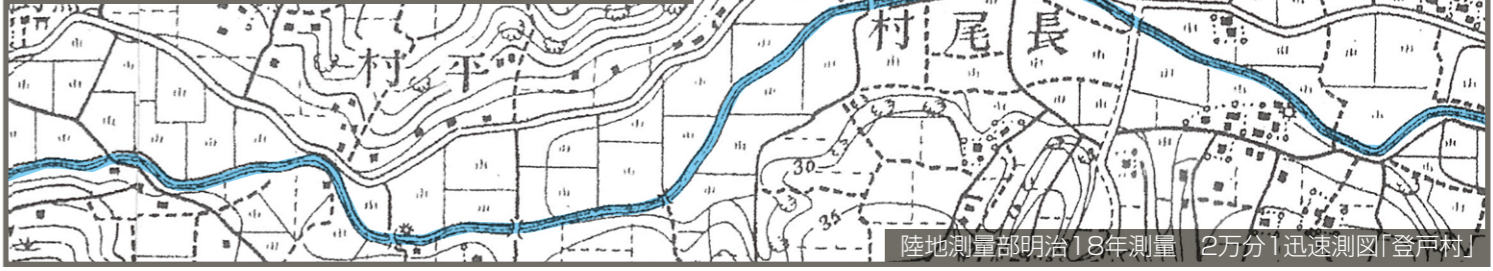


鎌倉時代から稲毛領の総鎮守。康平4年(1061)、源頼義が奥州遠征時に祈願して創建したが、その後、源頼朝が奥州藤原氏討伐に成功し再建したと言う。神社に伝わる禰宜舞(ねぎまい)は、慶長5年(1600)、家康が関ヶ原出陣に当たり、戦勝祈願を行うため、神主・小泉家に神楽を舞わせたと言う。

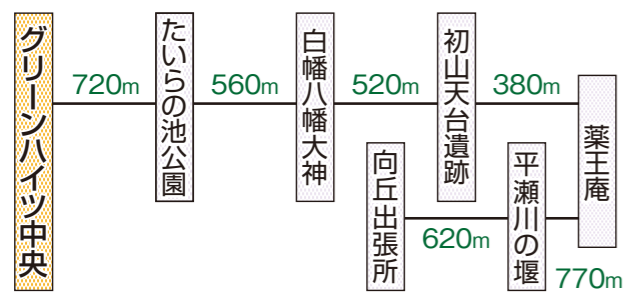
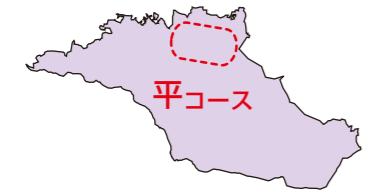
### 現在の平瀬川流路(1:10,000)



### 河川改修前の平瀬川流路(1:10,000)



全長  
約3.6km



インフォメーション: [グリーンハイツ中央]へのアクセス  
(バス)「鷺沼駅」から鷺1「宮崎台駅」行きに乗車し、  
[グリーンハイツ中央]バス停で下車してください。

### 参考文献

- 『新編武蔵風土記稿』 雄山閣
- 『川崎地名辞典基礎原稿』 平成8年 川崎地名研究所蔵
- 『川崎市石造物調査報告書』 昭和54年度 川崎市教育委員会
- 『川崎の庚申塔』 昭和60年度 川崎市博物館資料調査団
- 『川崎の民俗』 昭和54年 角田益信著
- 『小学校社会科副読本「記念誌」』 川崎市立小学校

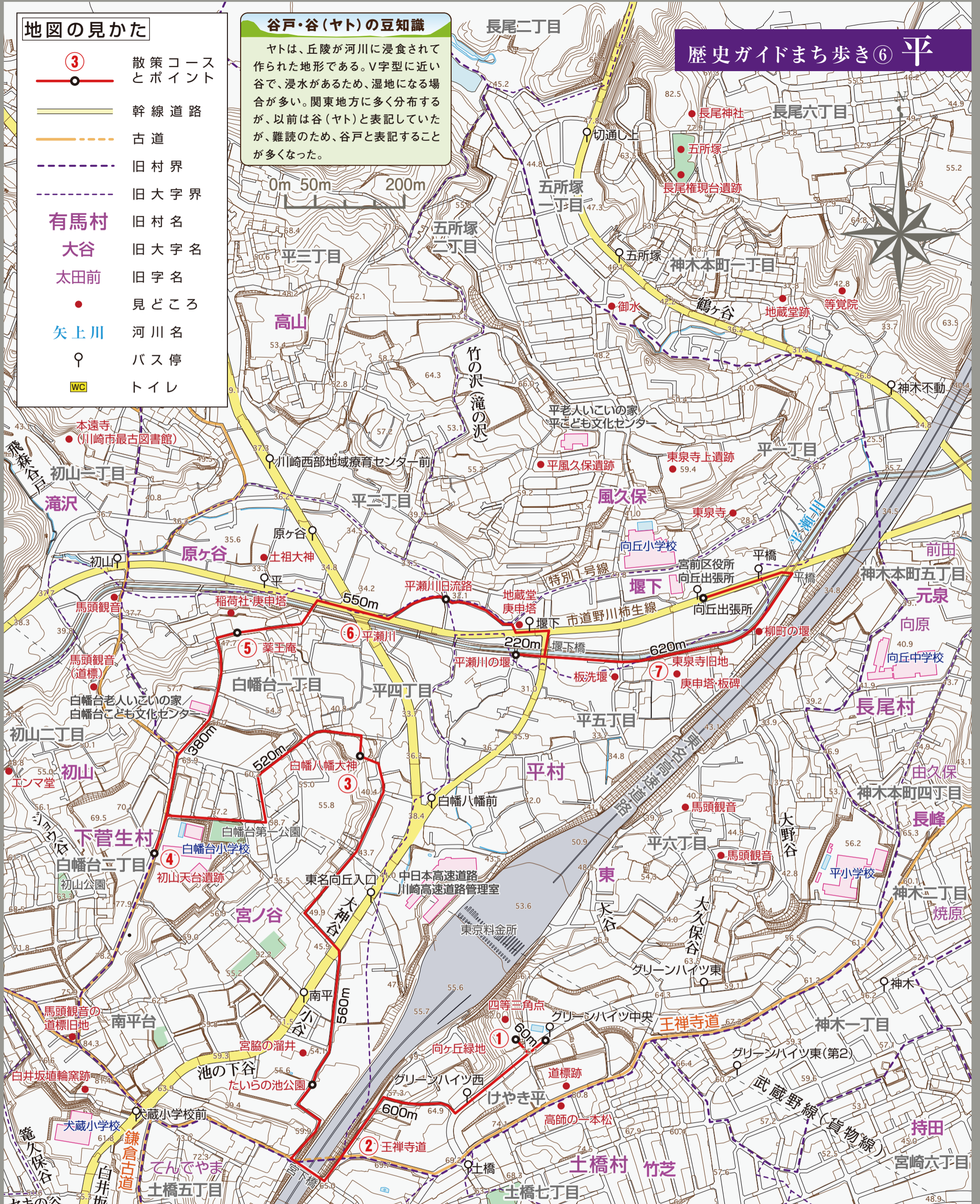
### 地図の見かた

- ③ 散策コースとポイント
- 幹線道路
- - - 古道
- - - 旧村界
- - - 旧大字界
- 有馬村 旧村名
- 大谷 旧大字名
- 太田前 旧字名
- 見どころ
- 矢上川 河川名
- ♀ バス停
- WC トイレ

### 谷戸・谷(ヤト)の豆知識

ヤトは、丘陵が河川に浸食されて作られた地形である。V字型に近い谷で、浸水があるため、湿地になる場合が多い。関東地方に多く分布するが、以前は谷(ヤト)と表記していたが、難読のため、谷戸と表記することが多くなった。

## 歴史ガイドまち歩き⑥ 平



### 白幡八幡大神の初卯祭(はつうさい)

3月最初の卯の日に行われる。稚児が的を射る祭(まとーさい)と藁大蛇の注連(しめ)を鳥居に架け奉納する行事からなる。平地区全域の4組の講中が大的、小的と弓矢、注連を分担して作成し、当日神社に集まって祭りは開始される。的は黒白の蛇の目で弓矢は現在、ガマズミの枝と矢竹、注連の大蛇は藁で編んだ60cm程の頭部に牛蒡

(ごぼう)の角、人参の舌、里芋の目玉をつけ、孟宗竹(もうそうちく)の芯に放射線状に取り付けた藁の胴体の尻尾の付け根に木製の剣を挿して出来上がる。予祝(よしゅく)行事である的祭と参詣者の邪気を祓う大蛇の注連は、新しい年の平穏を願う年中行事と解釈されている。藁大蛇の注連(しめ)は7月第3日曜日の夏まつりに降ろされる。



白幡八幡大神



藁大蛇の注連(しめ)